あなたを一人にしない　私たちに相談してください
大阪弁護士会 総合法律相談センター TEL 06-6364-1248

OPINION SLICE
オピニオン・スライス

大阪国際大学 現代社会学部 准教授
「全日本おばちゃん党」代表代行

谷口真由美さん

「おばちゃん」の目を政治に生かす

――「全日本おばちゃん党」をつくられたきっかけを教えてください。

去年の9月に自民党の総裁選と民主党の代表選がありまして、テレビをつけたら、画面が何か汚い色やなと思ったんですよ。スズメとカラスとハトしかおれへんなと。茶色、黒、グレーのお召し物のオッサンしか見受けられない。憲法が公布されて65年以上経つのに、代表戦の候補者にすら女性が立たせてもらえないというのがまだあんねやと。

「オッサンのオッサンによるオッサンのための政治」やなと感じまして。だったら、オッサンに対抗するのはやっぱりおばちゃんやなと。私らもおばちゃん党でもつくったろうかというぼやきをフェイスブックでしたんですよ。そしたら、友人たちが、おもしろい、やれやれみたいな感じで賛同してくれて。大阪弁護士会の会員も実は何人かおばちゃん党に入っていらっしゃいます。

――活動の目的はなんですか。

政治活動をするつもりはないし、特定の政党とか候補者を応援するつもりもありません。おばちゃん党のミッションは二つ。一つは、オッサン政治を許してきたおばちゃんの自戒の意味を込めて、おばちゃんが賢くなろうということ。もう一つは、オッサン政治に愛とシャレでツッコミを入れていくということです。

公序良俗に反しないとか人を傷つけないということであれば話題は何でもOK。毎日フェイスブック上では井戸端会議をやっています。対外的プロジェクトとして、女性手帳をつくる動きがあったときや女子柔道選手へのハラスメント問題、そして最近ではオリンピックが日本で開催されることをうけての「しんちゃんやるやる詐欺はあかんでぇ」などの声明を出しました。

「おばちゃん」って、大阪だと「大阪のおばちゃん」で割と市民権を得ている言葉の一つだと思うんです。だけど、一般的には「おばちゃん」と言うと、それこそその言葉自体がハラスメントと言われたりしかねない。でも、これはある種の女性解放だと思うんです。言った瞬間、楽になる。そないに頑張って若づくりせんでもええやん、オッサンのロリコン文化に迎合せんでもあなたはあなたであかんの？みたいなところが「おばちゃん」という言葉にこめられています。

全日本おばちゃん党はっさく

前文

おばちゃんは、政治のことを自分たちのこととしてとらえ、日本の未来を真剣に考えています。おばちゃんは、自分だけが幸せ、自分だけが安全、自分だけがよい生活は、いやです。おばちゃんは、全世界の幸せな未来を考えています。ゆくゆくは、全世界おばちゃん党を目指します！

その一　うちの子もよその子も戦争には出さん！

その二　税金はあるとこから取ってや。けど、ちゃんと使うなら、ケチらへんわ。

その三　地震や津波で大変な人には、生活立て直すために予算使ってな。ほかのことに使ったら許さへんで！

その四　将来にわたって始末できない核のごみはいらん。放射能を子どもに浴びさせたくないからや。

その五　子育てや介護をみんなで助け合っていきたいねん。そんな仕組み、しっかり作ってや。

その六　働くもんを大切にしいや！　働きたい人にはあんじょうしてやって。

その七　力の弱いもん、声が小さいもんが大切にされる社会がええねん。

その八　だからおばちゃんの目を政治に生かしてや！

――女性の社会進出まだまだ遅れているという気がします。大阪弁護士会の歴代会長にも女性はいません。

例えば社会というものが、片方の翼が男性、片方の翼が女性として飛んでいくならば、日本の公の場というのは男性の翼でしか飛んでいない。ところが、プライベートな場では女性の翼でしか飛んでいない。バランスが悪い。この話をすると途端にものすごい拒否反応を示される方がいっぱいいるんです。

社会的に活躍している女性に対して、若い世代の女性が「あれはあの人やからできるねんで」とかいう。上の世代の人たちもこれから後進を育てるにあたって、「私はこんなしんどい思いをしてんから」みたいなことを言うのをやめなあかんなと思うんです。

――「全日本おばちゃん党はっさく」は誰が考えたんですか。

私と仲間で考えました。果物のハッサクをもじって。こっちは、ハッサクって甘い部分もあるけど、酸っぱい部分も苦い部分もある、まるでおばちゃんの人生やなみたいな感じで。

――1番目が「うちの子もよその子も戦争には出さん！」ということで、戦争が1番目に来ていますね。

私たちは、自分の子どもを戦争には出したくありません。でも、うちの子を出さないと言うだけやったら、お母さんやお父さんにそう言ってもらわれへん子もいてる。そんな子が戦争に行かなあかんようになるんと違うかということで、私らは、うちの子もよその子も大事ということです。これに共感して入ってくださった方が結構多いです。

――憲法改正論議がかまびすしくなっていますが、どんな風にご覧になっていますか。

大学の授業の最初に、憲法を改正したほうがいいと思いますか、しないほうがいいと思いますかというアンケートを学生にとるんですが、したほうがいいというのが多いんです。200人超えの教室で7～8割近くいく。びっくりするわけです。そこから学生相手に喧嘩売っていくんです。中身見たことあんのか？って言うと、知らないと。

知らんものを知ったかぶりして何でそんなこと言うねんと聞いたら、「押しつけられた憲法やし」と言うので、憲法の成立過程のところをすごい丁寧にやるようにしています。授業が全部終わった後は、「押しつけとは言えない」、「押しつけとまでは言えない」とかになってくる。中身が分かって自分の意見を出すまでというのは実はすごい時間がかかるのに、あまりにも軽々しく憲法のこと扱い過ぎ違うのという話をするんです。

――大阪弁護士会は無料出張授業という企画をやっていますが、何かよいアイデアがありますか。

そもそも法とは何で存在していて、どうして必要なのかという根本的な話をしないといけないと思います。やっぱり中学生ぐらいから、憲法をきちんと教えるというのはすごい大事だと思います。

グループワークみたいなものをするというのが一番よくて、みんなこれどう思うというようなことを意見交換しながらやる。3回ぐらいは行かはったほうがいいと思います。1学期、2学期、3学期とか、最終的に生徒さんからの感想をもらって。弁護士も激務だと思うので、あまりしんどくならないところで。でも、大阪弁護士会にはユニークな方が多いじゃないですか。東京とかのシュッとした、おれイケてんねんみたいな感じの弁護士さんとはちょっと違う、もっと地元に根差してる感があるので、そこが大阪弁護士会の強みやと私は勝手に思ってるんです。

――弁護士会や弁護士の市民とのかかわり方で、こんな工夫ができないかということはありますか。

身近に感じてもらうために、大阪弁護士会の出張所みたいなものがあちこちにあったらいいのになと思います。出張サービスというのではなくて、行ったら相談できる人いてますねんみたいなものが大阪弁護士会の管轄区域の中にあるようなイメージです。例えば、無料相談で日を決められて市役所に行くというのもまた違うんですね。「時々来はんで、そこの出張所な。あそこ行ったら悩み聞いてくれはんで」というようなよろず相談所のような存在ですね。

（Interviewer：髙山　巌／Photo：武田）